

近代建築の成立過程における装飾の様態 —アントニ・ガウディとアドルフ・ロースの装飾観を通じて— Modes of Decoration in the Formation of Modern Architecture —Through the decorative views of Antoni Gaudí and Adolf Loos—

○ 飯田健太¹， 田所辰之助²
*Kenta Iita¹， Shinnosuke Tadokoro²

Abstract: Focusing on the formation process of modern architecture (1851-1921), a transitional period leading to the avoidance of ornamentation, the aim is to clarify the modes of ornamentation by taking up Antoni Gaudí (1852-1926) and Adolf Loos (1870-1933), whose attitudes toward ornamentation are contrasting in the current understanding of architectural history and whose views on ornamentation are strikingly different, and by examining the position of ornamentation in architectural thought.

1. 研究の背景と目的

装飾は飾ることを目的とした物や行為と定義される。先史時代の人間が身近なものを聖別する行為から始まった装飾¹は、重要な意味を持つ表現行為として建築においても西洋建築に代表されるオーダー等これまで盛んに用いられてきた。しかし、近代化の過程で忌避の対象となった²。これまでの建築論においても装飾の持つ個別性や従属性という特質から後から付加されたものが装飾と見なされ、建築にとって本質的なものではない二次的要素として論じられてきた。ポストモダニズム期(1960年代)においてロバート・ヴェンチュリは建築形態の象徴性に着目し、近代化の過程で装飾は造形付加から建物自身に変容した³と指摘している。しかし、その具体的な様態は明らかにされていない。

装飾忌避に至る過渡期であった近代建築の成立過程(1851-1921)⁴に着目し、建築史の現在の理解の中で装飾に対する態度が対照的であり、装飾観の相違が顕著であったアントニ・ガウディ(1852-1926)とアドルフ・ロース(1870-1933)を取り上げる。ガウディは建築表現の複雑さから装飾過多と見なされていた一方で、ロースは「装飾と罪悪」という言説や建築表現のシンプルな形態と簡素なファサードから無装飾を主張したと見なされていたことから現在の装飾解釈に影響を与えた2人だと考えられる。また、同時期に設計された2人の作品「カサ・ミラ(図1)」と「ロース・ハウス(図2)」は、これまでの造形付加の装飾や近代建築に見られる装飾付加の忌避とは異なる意味合いでの装飾性を帯びていることからこの時代に装飾は変容したという仮説のもと建築思想と装飾の位置付けを考察することで装飾の様態を明らかにすることを目的とする。



図1 「カサ・ミラ」



図2 「ロース・ハウス」

2. アントニ・ガウディの装飾観

2-1 建築思想

ガウディは、樹木を模範とした合理的な造形原理に美を見出し、建築形態の根拠を自身が偉大な書物とする自然界に求めた。目的を明確に示している建築は、人間の体を持つプロポーションと同じ性格を持ち、自然界で生存と持続の条件をはっきり示す樹木に似た性格を持つ。建築目的を明確に示すための建築形態を求め、思想を鮮明に表現するためには装飾は少ない方が良いと主張した。

2-2 装飾に関する言説

ガウディは、学生時代に記した自筆のノート(『日記装飾論』)の冒頭で“私は、装飾について研究しようと思う。”⁵と述べ、ヴィオレ・ル・デュク(Viollet le Duc, 1814-79)の『建築講話』を参照し、歴史的建築様式の装飾についての考察から①構造と一体化した歴史的建築の評価②装飾の量と統一感に関する考察③自然界をモチーフとした公共建築の装飾の3点について指摘している。

2-3 作品分析 構造と装飾の関係

ガウディの装飾理念として①視覚的教育を目的とした装飾(=建築の性格を示す手段)[図3] ②言語として建築を語る装飾(=装飾の持つ意味伝達のための建築造形的手段)[図4] ③建築表現の補助、化粧として建築を被覆する(表面処理)装飾(=対象物に性格を持たせる手段)[図5]の3点が挙げられる⁶。②から機能的な必要性から導き出される建築形態の変化(変形)が見られること、③から粉砕タイルによる曲面被覆の新技术がガウディ建築の装飾過剰と見なされる一因だと考えられる。ガウディの建築にはこのような構造と装飾が互いに影響を及ぼしあいながら建築形態が作り出されている。



左から図3「グエル教会」、図4「カサ・バトリヨ」、図5「グエル公園」

2-4 装飾の位置付け

ガウディは、樹木を模範とし、建築形態の根拠を自然

界に求めた。建築目的を明確に示す統一感を持った建築の実現のため装飾の部分使用を好み、構造と装飾を対等に扱った。ガウディにとって装飾は、構造の美しさを強調し、建築の性格を視覚的に伝達する、重要な意味を持つものであった。

3. アドルフ・ロースの装飾観

3-1 建築思想

ロースは、空間と形態の芸術である建築は過去を参照し、材料によって気分を喚起させることを主張した。形態は材料の持つ使用適正と生産方法とから生成するものであり、自然界の様式化、すなわち日用品への転換を目指した。ロースにとって被覆をして内部空間を作る行為が構造体を作るよりも先に存在した。

3-2 装飾に関する言説

「装飾と罪悪」において、装飾行為そのものを批判したのではなくドイツ工作連盟やウィーン工房の日用品と芸術の統合により新たな装飾を作り出す行為を対象にした。装飾の新たな復権は、日用品の質の早期低下や労働・材料の浪費が文化の進展を損なうことで罪を犯していると指摘した。ロースは人間の内面からくる衝動行為である装飾と日用品を区別することを主張し、今まで装飾に注がれてきた嗜好は、素材に注がれるべきだと述べた⁷。

3-3 作品分析 材料（大理石の用い方）

表 1 大理石の使い分け

		用途	種類（大理石）
1903「カルマ邸」	①	書斎	黒
	②	玄関ホール	スキロス
	③	居間	チポリーノ
	④	食堂	白
1908「ケルトナー・パー」	⑤	入口扉	白
1911「ロース・ハウス」	⑥	共同住宅 階段	スキロス カッラーラ
	⑦	ファサード	チポリーノ
1915「ドゥシュニッツ邸」	⑧	食堂	パオナツィット
	⑨	音楽室	チポリーノ
1931「ヒューゴーゼムラー邸」	⑩	音楽ホール	ファンタスティコ

				
①図6	②図7	③図8	④図9	⑤図10
				
⑥図11	⑦図12	⑧図13	⑨図14	⑩図15

図6-15：大理石の使い分け

ロースの建築作品では、「カルマ邸 [図 6, 7, 8, 9]」や「ロース・ハウス [図 11, 12]」のように大理石の使い分けがなされ、現在7種類以上確認できる。

3-4 装飾の位置付け

ロースは、当時の人々が日用品に芸術を付加する行為（＝装飾）を労働・材料の経済性から批判し、装飾行為を人間の欲望からくる衝動的なものの、無装飾はそれが抑圧されたものと位置付けた。ロースにとって装飾は、古代からずっと存在する材料固有の効果がこれまでの装飾に変わるものであった。

4. まとめ

ガウディとロースの装飾観の相違を考察することから表現行為の装飾として好き勝手に施されていた当時の文化に対して、共通の問題意識を抱いていた。近代建築の成立過程において装飾は、造形付加からガウディのいう建築形態の変化（[図 16]）やロースのいうマテリアルによる被覆（[図 17]）へと変容していったと考えられる。

過去の様式の模倣による建築表現は限界を迎え、新たな建築表現が模索されていく中で、ガウディとロースは、ともに始源に戻り、自然界を模範としていた。ガウディは構造と装飾を結びつけることで自然形態に、ロースは自然の材料に建築表現の根拠を見出していたことが装飾観の相違の要因である。装飾付加の忌避というモダニズムの規範から捉えようと、過剰な装飾、無装飾と解釈されてしまうが、二人とも共通の問題意識を抱き、自然をモデルとする合理的建築観から装飾を考えていた。つまり、近代建築の装飾忌避とは異なる装飾観のもと建築表現と装飾の可能性を追求していたといえ、近代建築のもう1つの在り方を提示していたと考えられる。



図16「カサ・ミラ」



図17「ロース・ハウス」

¹山崎正和『装飾とデザイン』中公文庫、2015

²ヘンリー・ラッセル・ヒッチコック、フィリップ・ジョンソン『インターナショナル・スタイル』鹿島出版会、1978：1922年以降の建築様式を国際

²ヘンリー・ラッセル・ヒッチコック、フィリップ・ジョンソン『インターナショナル・スタイル』鹿島出版会、1978：1922年以降の建築様式を国際様式とし、特徴としてヴォリューム、規則性、装飾付加の忌避を挙げた。

³ロバート・ヴェンチュリ/石井和敏(訳)『ラスベガス』鹿島出版会、1978

⁴ケネス・フランプトン『近代建築の歴史 1851-1945』ADA エディタートークョー、2019：近代建築の黎明期を1851-1919、開花期を1920-1945と位置付けた。註2と4から近代建築の成立過程を1851-1921と推定した。

⁵松倉保夫『ガウディの装飾論』相模書房、2003

⁶鳥居徳敏『ガウディの7つの主張』鹿島出版会、1990

⁷アドルフ・ロース/加藤淳(訳)、鈴木了二、中谷礼二(監修)『ボチャムキン都市』みすず書房、2017。『にもかかわらず』みすず書房、2015。『虚空へ向けて』アセテート、2012

図1, 3, 4, 5, 16：註5に同じ、図2, 6-15, 17：建築と都市、2018, 6「アドルフ・ロース インテリアから都市まで」No. 573